

NY チェアシリーズにみる新居猛のデザイン思想

The Design Ideas of Takeshi Nii in Ny-Chair Series

片山勢津子

Katayama Setsuko

京都女子大学 短期大学部

Abstract: The changes of Nii's chairs show us that he has consistently improved chairs for a popular easy chair. His chairs, produced in his own company, were thoroughly reduced in costs, and as a result, led to his characteristic folding ones. When imitation products appeared, he filed a suit for the copyright violation, but his

Key Word: chair, design idea, Ny-Chair

1. はじめに

NY チェアは、新居猛の一連の折り畳み形式の作品を指す。中でも MOMA の永久収蔵品に選定されている NY チェア X (1970) は、国内で 60 万代、海外で 20 万代もの数が出荷され、日本の椅子としては珍しく海外にまで広く親しまれている。さらに近年では雑貨店等でも手軽に購入できるようになり、一般若年層に親しまれ、再び脚光を浴びている。しかしながら廉価であるために還って作者やその一連の作品、制作姿勢についてあまり認識されていないのが実情である。

そこで本稿では新居猛が椅子制作に至った経緯や椅子の系譜、コピー製品を巡る裁判などから NY チェアの制作思想を探る。

2. 椅子の制作に至るまで

新居猛は 1920 年、徳島市に剣道具屋の三代目として生まれる。祖父の儀八は、目利きとして江戸にまで知られた美術骨董商で、その血を受け継いだのか幼少の頃より手先が器用だった。中学卒業してからは家業に従事していたが、第二次世界大戦後、GHQ によって剣道が禁止になったため廃業に追い込まれる。そこで、彼は持ち前の手先の器用さを生かそうと、徳島県職業補導所木工コースで木工技術を身につけ (1947)、建具工場で修行を積み、知人と剣道具工場跡地に木工場「便利堂」を開設 (1949) する。その後、剣道復活にともなって剣道具も手掛けるようになる (1954) が、35 歳で結核を患い、工芸品の制作を始めるようになる。

初期の作品としては、県土産品コンクール奨励賞受賞の「阿波鶴こけし」、中小企業輸出振興展奨励賞受賞の「阿波踊りガラスパネル」、県展特選一席の「丈六寺山門額」がある。

工芸品の制作から家具制作へと転向する契機となったのは北欧家具の素晴らしさに出会ったことである。北欧家具で最も関心をひいたのはニールセンとヴィートの組み立て式ハンセンチェアだった。但し、それより手間をかけず、安上がりだが座り心地も機能性も引けを取らない椅子を作ろうと決意した。そして、剣道具の縫製技術を生かしたディレクターズチェアを作ろうと試作に取り組む。産業試験所を何度も訪問し、北欧家具の

suit was not approved and rejected even at the Supreme Court. This is why he has strongly aimed at an original product others can't imitate. His craftsmanship can be found in Ny-Chairs, with which he has made western-style chairs with Japanese traditional skills in his efforts to make an inimitable chair.

収集品を研究し、剣持勇や豊口克平の指導を受けた。試行錯誤の結果、初の試作椅子「木製折り畳み小椅子」が完成 (1956 年) し、以後、次々に作品を発表する。「折り畳み寝椅子」(1957) は中小企業輸出振興展で振興賞を受賞、「木製組み立て椅子 (後の NY チェア K1)」(1958) は同展の中小企業長官賞を受賞した。これを期に、大阪を拠点としたデザイナーグループ「創作の室」のメンバーとなり精力的に活動するが、制作活動は一貫して地元徳島で行われた。

3. 椅子の構造と変遷

詳細の分かる椅子は 24 点、このうち特徴のあるのは NY チェアシリーズの 9 点と試作 2 点、計 11 点である。追求しているのは、一貫して安楽椅子である。これらの変遷をみると、座り心地の他に折り畳み形式、安定性、軽量化、使用場所などを考慮して、改良が加えられていることが分かる。大きな変化としては、まず、それまでなかった左右折り畳み形式にすることで、座面を後方に傾斜させ、背座面のキャンパスに両側からの張力によってクッションの役割をもたせるようにした (1956)。次に、キャンパスのたるみを防ぐために予め伸ばした生地を使用し (1960)。さらに、キャンパス地を丈夫な濾過布に変更した (1980)。この他、構造的には常に改良や新しい工夫を取り入れている。

シリーズに共通するのは徹底的なコスト削減である。折り畳み形式に拘ったのも、使用者の持ち運びや収納を考慮したというよりも、徳島の自社工場からの輸送費削減を念頭に置いたものだった。コストを抑え、日本のできるだけ多くの家庭で使って欲しいという願いがそこにはある。その思いは今も変わらず、コスト削減のために近年では海外で製作している椅子もある。

椅子の試作にはかなりの時間がかかる。必ず自分でしばらく使用して、座り心地や安定感、耐久性などを細かくチェックし、改良を加える。自社工場での製作過程でも、様々な工夫が加えられ試される。工房のような小規模な工場では、他の家具工場とは異なるきめ細かな椅子造りが今も行われている。



木製折畳椅子 (1956)
ディレクターズチェアの初試作品



縦式折畳椅子 (1956)
左右折り畳み形式の初試作品



NY チェア K1 (1958)
座と背が一本のパイプで連続



NY チェア K2 (1960)
脚部を金属パイプに、布地改良



NY チェアシンプル (1966)
U字脚で畳擦り、折り畳めない



NY チェア X + NY チェア オットマン (1970)
座ると布地が左右に張りクッション性が増す



NY チェア X ヤング (1972)
前脚の交差部が脚に当たらないよう変形



NY チェア X2 (1975)
交差部にスチーを入れて安定させる



NY チェア X80
よりコンパクトに収納



NY チェア ニュー X (1984)
肘掛けを改良



NY チェア F1 (1989)
伸縮装置をつけ操作しやすく丈夫に

図 椅子の変遷

4. コピー製品と裁判

裁判は、「NY チェア X」の粗悪なコピー商品を販売した(株)ニッセンに対して、著作権の侵害を訴えたことに始まった(1989)。意匠権はすでに消滅しており弁護士に断られ、孤立無援で裁判に臨んだ。争点は文化的な創造物を保護の対象としている著作権についてである。椅子が著作権の対象となる根拠について問われた地方裁判所からの補正書に対し、彼は、次のように回答している。(以下抜粋)

真に秀でるデザインは数少ない好事家などを対象とするものでなく、世の中の多くの人々に役立つ自転車のようなもので、ファッションでない地道な寿命を保つものでなければならず、その形態はあたかも地球の生物のごとく、うちに自然淘汰に耐える十分な内容を蓄え、外の何の荷いも無駄もないスマートなフォルムは、自ずと絶妙の機能美をかもし出すもので、それは必ずや、花鳥風月を愛でるに通じ、天の摂理でもある。

彼のデザイン思想を如実に表わした一文であるが、結局、椅子は著作権法の保護の対象となるものではないとの理由で棄却され、上告したものの最高裁では棄弁として棄却された。

国内でこの著作権問題が起きる以前にも、海外で NY チェア X のイミテーションが出回った。その一つは、スウェーデンの大型家具店イケアのカタログに掲載されたもの(1976)で、ミラノサローネで発表されたイタリアの椅子(1974)の販売権を取得したものだった。コピー椅子はドイツのデザイン誌「MD」の表紙を飾ったこともある。さらにパテントが切れた平成2年

からは世界各地で粗悪なコピー商品が出回った。このように、コピー商品には長年悩まされている。

工芸品を作った経験のある新居にとって、デザインをまねた商品が合法的に出回るという事実は理解し難いことだと考える。苦い経験の末、彼は「真似のしにくいほど得意な機能を持つオリジナル製品を作りたい」という思いを強くしていく。

5. まとめ

NY チェアの目指すところは、一貫して日本の家庭用安楽椅子である。廉価だが、決して座り心地や形態において引けをとらず、長年使用しても飽きのこない丈夫な椅子である。畳の上でも使用でき、コンパクトに折り畳め、真似のできない構造をもつが、無駄のない形の椅子である。

剣道具や工芸品を扱った経験のある新居の制作姿勢は、職人そのものである。改良を加えて一途に折り畳み椅子を作り続ける。2003年にはNY チェアメッシュニューXを発表、さらに現在も金属の折り畳み機構をもつ椅子を安価で海外生産しようと試作している。

彼は自分の椅子の思いを語る時に「自転車のように」と常々形容する。どの家にも自分の椅子が役立つことを願っているのである。他のデザイナーとは違う思いをこの言葉から知ることができよう。

[謝辞] 御協力いただいた新居猛氏に深謝申し上げます。